

所属・資格 総合文化研究室・准教授

申請者氏名 土屋 弥生

研究課題		生徒指導事例に関する現象学的・人間学的分析による実践知および指導方法の解明
報告の概要	研究目的 および 研究概要	本研究においては、教育現場のさまざまな生徒指導事例を対象に、フッサールの現象学的分析およびV.v.ヴァイツゼッカーのパス分析をおこない、そこから得られた実践知を基盤とした生徒指導の方法を導き出すことを目的とした。この目的を達成するために、不登校の児童生徒、発達障害が見られる児童生徒やメンタルヘルスの課題が見られる児童生徒などの理解と対応について、心理学的・医学的知見を背景にしつつ、それらの立場との違いを明確にしながら、現象学的視点・人間学的視点から考察をおこなった。さらに、実際の生徒指導において、現象学的な発生的分析の手法を用いることにより、具体的な指導方法が導き出されることがわかった。
	研究の結果	研究の結果、教師の実践知形成においては、医学・心理学的な研究知見に加え、現象学的・人間学的視点を導入することの重要性が明らかになった。教師の実践知は単なる理論知の集積により形成されるものではなく、さまざまな特性をもつ児童生徒にその場で具体的な指導をおこなうための総合的な知である。それは、フッサール現象学によって考えられる受動綜合の世界におけるコミュニケーション能力（受動的志向性の世界）を基盤とした教師の身体能力であり、その都度かたちを変えながら形成されるものである。また、このような教師の実践知を基盤として、個々の児童生徒の状況をとらえたうえで現象学的な発生的分析を導入することにより、児童生徒の実態に即したオーダーメイドの指導方法を考案し、教育実践につなげることができることがわかった。これらの研究成果から、教職志望学生が現場における体験学習（インターンシップ・ボランティア）を通して実践知を形成し、指導方法構築の力を養成できるような教師教育の展開が不可欠となることが明らかになった。
	研究の考察・反省	本研究により、教師の実践知の構造、個々の児童生徒の状況に対応するための現象学的な指導方法の構築について明らかにすることができた。今後は、これらの研究成果について、実際の教育現場における有効性を検討する必要がある。そのために、現職教師とのリフレクションや意見聴取を通して研究成果と教育実践の往還のしくみをつくり、研究成果の教育現場への適用方法を明らかにすることが課題となる。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所  研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>【研究発表】</p> <p>(1) 日本臨床教育学会第12回研究大会 「不登校児童生徒の身体性に着目した指導についての人間学的一考察」 (2022年10月15日/立命館大学)</p> <p>(2) 日本臨床教育学会第12回研究大会 「臨床教育における実践的な運動研究の基礎－ポイテンディク (Buytendijk, F.J.J.) の運動思想に着目して」 (2022年10月15日/立命館大学)</p> <p>(3) 大学地域連携学会第2回大会 「学校におけるインターンシップの課題と展望－現場で活躍できる教師に必要な能力とその養成－」 (2022年10月22日/日本大学文理学部)</p> <p>【研究成果物】</p> <p>(1) 「不登校児童生徒の指導の方法に関する現象学的人間学的一考察」 『教師教育と実践知』第7巻15-23 (2022年6月30日) 日本大学文理学部教職センター</p> <p>(2) 「緘黙傾向が見られる児童生徒の理解に関する現象学的一考察」 『学校教育研究』第37号86-98 (2022年8月31日) 日本学校教育学会</p> <p>(3) 「自閉症スペクトラム傾向のある児童生徒の指導方法に関する現象学的一考察」 『生徒指導学研究』第21号55-64 (2022年12月25日) 日本生徒指導学会</p> <p>(4) 「体験学習の実践知に関する大学地域連携学的一考察－学校におけるインターンシップやボランティアを例にして－」 『大学地域連携学研究』第2巻 (2023年3月31日発刊予定) 大学地域連携学会</p>	